

# 「くつをぬいで。」

-日本・メキシコ・スペインアーティスト・イン・レジデンス-

**2005年7月29日[金]ー8月4日[木]**  
**12:00→18:00 日曜日休館 入場無料**  
**会場:名古屋芸術大学アート&デザインセンター**  
 ●オープニングパーティ 7月29日[金] 16:30ー18:00  
**主催:日本イペロアメリカ芸術国際交流支援団体**  
**運営:「くつをぬいで。」実行委員会**  
 (Tel:080-5426-8741 E-mail:yatm81@hotmail.com 浅香)

本展では、日本・メキシコ・スペインの16人のアーティストが、愛知県西春町と西区中小田井の願王寺に滞在し、名古屋芸術大学で制作した作品を展示します。展示会を交流の場である座敷とイメージし、一度「くつをぬいで」裸足になり、他国の文化をはくことで国際交流をすることが目的です。さらに関連企画として、国という衣をぬいで地域の人々と裸のつきあいをし、空間と時間をアートを通して共有したいという思いから、2会場の間にある8カ所の湯屋で「ふくをぬいで。」という展示会も開催します。

関連企画  
**「くつをぬいで。」同時開催**

**2005年7月29日[金]ー8月4日[木]**  
**会場:名古屋大学野依学術交流記念館**  
 愛知県名古屋市千種区不老町

**「くつをぬいで。」第2期展示**  
**2005年8月6日[土]ー8月20日[土]**  
**会場:善光寺別院願王寺書院明光閣**  
 愛知県名古屋市西区中小田井1-377



**「ふくをぬいで。」-ごらくくアート湯屋企画-**  
**2005年7月29日[金]ー8月20日[土]**  
**会場:山花温泉・常磐温泉・今池中将湯・君の湯・神明湯・杉の湯・小田井温泉・末広温泉**

7月30日[土] 15:00より神明湯において「湯談会」を行います。  
 企画:小野綾香・平田あすか・藤池正太・宮村こずえ  
 運営:「ふくをぬいで。」実行委員会

展示会の開催場所である名古屋芸術大学と名古屋大学を結ぶ路線の駅周辺にある湯屋から8つの湯屋にご協力をいただき、作品を展示します。展示会場と各湯屋を星座のようにつなぎ、アートの架け橋をつくります。



**アート&デザインセンター**



**6** EXHIBITION **9**  
 SCHEDULE  
**展示会スケジュール**  
 Open 12:00ー18:00  
 (最終日は17:00まで)  
 日曜・祝祭日休館  
 【入場無料】となってもご覧いただけます。

- 6/ 3金→ 6/ 8水 日本画`00展 (BE)
- 6/ 3金→ 6/ 8水 デバプロ展 (be)
- 6/ 3金→ 6/ 8水 pipによる「チュチュ」展 (Studio)
- 6/ 17金→ 6/ 22水 “for site scenes” プレメー・ナゴヤアートプロジェクト2005紹介展
- 6/ 24金→ 6/ 29水 「こんにちは」スリナカリンウィロット大学・名古屋芸術大学交流展
- 7/ 1金→ 7/ 13水 しなやかな布ーRud Witt展
- 7/ 15金→ 7/ 20水 名古屋芸術大学前期留学生作品展
- 7/ 22金→ 7/ 27水 素、材、展
- 7/ 29金→ 8/ 4木 「くつをぬいで。」ー日本・メキシコ・スペインアーティスト・イン・レジデンスー
- 8/ 5金→ 9/ 19金 夏期休館
- 9/ 20水→ 9/ 28水 ソフトスカルプチャーへ展 VI (仮)
- 9/ 30金→ 10/ 5水 書道芸術演習・作品展

# B!e

特集 Artist in Residence

## 『場としてのアーティスト・イン・レジデンス』

“アーティストが滞在し創作活動に専念できるスタジオやアトリエを備えた施設や機関”をくアーティスト・イン・レジデンス: Artist in Residenceと称することは、1990年代以降のわが国において、言葉としては周知されてきたと言えるだろう。あえて「言葉として」と強調したのは、定義はあるものの、その実態と現象は極めて多様で、その質的レベルも様々だと言わざるを得ないからだ。アーティスト・イン・レジデンスの原型をフランスの「ヴィラ・メディシス」(※1)というローマへの留学施設とするのは定説だが、日本の場合は、80年代の美術館における公開制作や教育普及事業としてその端緒が認められる。(※2)さらに美術館建設の過渡期を経た90年代では、地方自治体の新たな文化事業&まちおこし・国際交流事業としてのアーティスト・イン・レジデンスが目目された。ここでは欧米のシステムを見習ったかに見えても、結局のところ文化イベントに終始し、継続的かつ実験的な発展が望めない行政主導の限界を露呈する例も少なくなかった。(※3)

次に90年代末から2000年代はじめにかけては、設立のコンセプトを練り上げ段階的に事業化していった茨城県の「アーカス」の功績もあり(※4)、システムを継続的に展開する場(建築)も出現した。それが、山口県の「秋吉台国際芸術村」(設計:磯崎新)(※5)であり、青森市の「国際芸術センター青森」(設計:安藤忠雄)(※6)である。これらに共通するのは、美術・音楽・ダンス・演劇など扱うジャンルを幅広く設定していること、そして海外・国内からもアーティストを公募審査して受け入れ、専門の学芸員を有し、村おこし的な地域振興から踏み出した志向を展開している点である。また豊かな自然環境を尊重した建築環境も特徴であろう。

こうした施設では何が目指されているのか?美術館とは何が異なるのか?端的に言えば、アートの無形の力を普及する場ではないかと私は考える。つまりモノとして、観賞するための作品を最終目標とはしない、制作行為そのもの、アーティストという存在そのもの、あるいはその思考のプロセスを示していく場ではないだろうか、と。それは、広い意味での“教育の場”ではないか。



- 1.秋吉台国際芸術村本館棟外観(写真:大田道洋)
- 2.秋吉台国際芸術村 守章レジデンス創作作品「みんな」2001(写真:大田道洋)
- 3.国際芸術センター青森(写真:松岡満男)
- 4.国際芸術センター青森 植松奎二「地軸の傾きから」展 2003(写真:スタジオクルー)
- 5.citta dellarte(チッタ・デッラルテ)レジデンス棟(写真:高橋綾子)



一昨年訪ねたイタリアの北西部町・ビエッラにある「チッタ・デッラルテ(芸術村)」(※7)は、イタリア現代美術の巨匠・ミケランジェロ・ピストレット(1933~)が設立した、まさに“教育の場”であった。「UNIDEE(ユニディー)=University of Ideas」という4か月単位のレジデンス・プログラムには、世界各地から若いアーティストたちが集まる。そこの何よりの魅力はイタリアの風土でも建築でもなく、ピストレットが提唱する哲学なのだ。アートとは、責任を持って社会的な価値を生み出すこと...そのためのリサーチを綿密に行なうことを学び、提案し実践すること、まさにその行為こそがアートなのだ。場としてのアーティスト・イン・レジデンスに不可欠なのは、そのシステムを根本で支える芸術哲学である。(高橋綾子/美術学部美術文化学科講師)

※1 Villa Medicea:17世紀にフランス政府が優秀な芸術家をローマに留学させるために設けた滞在施設のこと。ヴィラ・メディシス海外派遣プログラムは現在も継続され世界の主要都市にスタジオを設けて、美術だけでなく音楽・ダンス・映画など多様なジャンルの芸術家を派遣している。  
 ※2 80年代の公立美術館の中では、宮城県立美術館の普及課による創作プログラムや東京の世田谷美術館、目黒区美術館のワークショップ、さらに埼玉県立近代美術館の現代美術企画展における公開制作などアーティスト・イン・レジデンスの要素が見出される。  
 ※3 1993年東京都が「TAMA5いふ21」の一環として多摩地区4市町村で実施した「アーティスト・イン・レジデンス事業」が先駆けである。  
 ※4 ARCUSは、ラテン語で「門」という意味。茨城県守谷市の小学校跡のスタジオを中心に展開。1991年に専門家たちの協力でまとめた構想をもとに95年からパイロット事業を開始、2001年からプロジェクトとして事業化してきた経緯がある。  
 ※5 <http://www.artnet.or.jp/>  
 ※6 <http://www.acac-aomori.jp/>  
 ※7 Cittadellarte ~ Fondazione Pistoletto <http://www.cittadellarte.it/>

編集後記  
 愛・地球博も会期を折り返し、名古屋も少しくグローバルな空気が馴染んできました。本学にも毎年アジアやヨーロッパの国々からたくさんの交換留学生が滞在しています。また今年はアート&デザインセンターでも国際交流を主眼とした展示会が多く開催されており、学内あるいは地域の中で様々な交流が育まれています。人を通じて異文化に触れていくことがやがてお互いの意識の中で成長しかたもなっていくに違いありません。

B!e Vol.9  
 発行日 2005年7月15日  
 編集 江坂恵里子(アート&デザインセンター)  
 発行 名古屋芸術大学アート&デザインセンター  
 〒481-8535 愛知県西春日井郡西春町徳重西沼65  
 Tel. 0568-24-0325 Fax. 0568-24-0326  
 E-mail adc@nua.ac.jp  
 URL http://www.nua.ac.jp  
 デザイン 岩田知人(サンメッセ株式会社)  
 印刷 サンメッセ株式会社  
 2005 Printed in Japan  
 © Art & Design Center, Nagoya University of Arts



最寄りの交通機関をご利用の場合  
 名鉄大山線(地下鉄鶴舞線乗り入れ)  
 西春-名古屋芸術大学下車西へ約1000m徒歩15分  
 ※各駅-乗換案内の欄から各駅まで徒歩案内の案内が下車してください  
 中部国際空港からも名鉄大山線をご利用ください  
 西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります

自動車をご利用の場合  
 名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分。

“教育の場”である大学に、アーティスト・イン・レジデンスはどのように存在するのか？留学生もいるし、客員教授もいるし、アート&デザインセンターに作家も制作のために滞在する...でもそれがすなわち、アーティスト・イン・レジデンスなのだろうか？大学としてはじめてアーティスト・イン・レジデンス事業を制度化したのは、金沢美術工芸大学の「国際的芸術家滞在制度」（1998年～）であり、2001年からは金沢21世紀美術館との共同事業として展開している。さて、名古屋芸術大学ではどうか？交換留学など国際交流が盛んな本学ではあるが、アーティスト・イン・レジデンスに関しては、まだまだ明確な制度や十分な体制は構築されていない。しかし、学科やコース単位で、ささやかなれど志は高く、有意義な成果を上げている実践もあるので、ここで紹介することにしよう。

(高橋綾子／美術学部美術文化学科講師)



Remisen [レミセン・アカデミーとの交換レジデンス・プログラム]  
本学とデンマークのブランデ市レミセン・アカデミーとの作家交換プロジェクトである。1996年に版画コース西村正幸先生が名古屋の画廊・ガレリアフィナルテの仲介でレジデンスの機会を得たのを契機に、1999年より本学の卒業生を対象に絵画科の教員の推薦によって、以後毎年2名の派遣が継続されている。渡航費は自費ではあるが、ブランデ市では絵画制作のための画材、宿泊、朝昼晩の食事を支給。6-7月の約3週間、ヨーロッパを中心に20数名の作家が招聘され、旧機関車庫のアトリエで制作三昧の日々。99年からは本学に、レミセンでのレジデンス経験者の中から2名を招き、公開制作・レクチャー・展覧会を開催している。本学アート&デザインセンターでの展覧会開催にあたっては、スタジオでの制作や諸々の準備・運営を、西村先生と版画コースの学生が中心となって行っている。西村先生によると「レジデンスは、滞在先での人的交流が重要。行って、作品をつくって、それでおしまいではなく、責任が生じるシステムだ。だから、学生たちも外国から招いた作家たちと交流することで、自発的に学ぶことがきつとあるはず。」

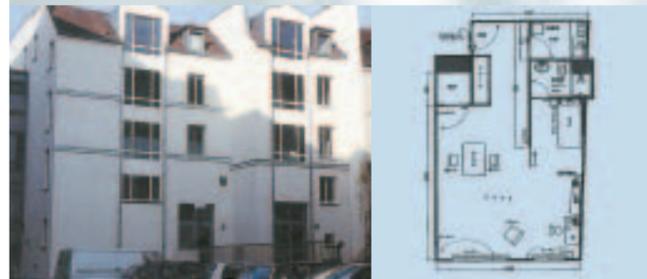
Artist in Residence 『場としてのアーティスト・イン・レジデンス』

国際芸術センター青森の学芸員・真武真喜子氏は、「アーティスト・イン・レジデンスは通過の場所である」という。「アーティストがそこで滞在し、制作し、作品を公開あるいは観客と交流する。一定期限が来れば、すべて畳んでプログラムは終了し、残るのは記録のみである」と指摘されている。大学もまた、通過の場所である。だからこそ、充分な足跡（記録）を残していつか欲しいと願っている。

名古屋芸術大学にもある!? 大学におけるアーティスト・イン・レジデンスとは?

Cite Internationale des Arts

【長期滞在ホテル(バリのアトリエ)】



シテ・アンテルナショナル・デザール(シテ・デザール)は、1965年に設立されたバリの中心に位置する最も規模の大きなレジデンス施設である。フランスを含め世界中の現代美術作家、ビデオ・アーティスト、音楽家、ダンサーなどに制作の場を提供してきた。本学はシテ・デザールと契約し、教員や卒業生などの芸術研究目的での滞在が認められている(原則として2カ月以上1年以内:研究目的や業績の審査が必要である)。5階建てのシンプルな建築で、アトリエは家具付きで必要な生活設備は整っている。制作に没入するというよりは、バリという芸術都市を研究、堪能するために活用できる価値の高い場であるようだ。音楽家にはピアノの貸し出しもあり、地下には練習場もあり、滞在中にシテが企画するコンサートに参加することもできる。また美術作家には、版画や写真のアトリエもあり、毎春の展覧会に出品することも可能。貴重な大学提携施設として、今後も多様な活用がのぞまれる。

元味噌蔵 金清

【プレーメン・ナゴヤアートプロジェクト2005】



来る9月に、ドイツ・プレーメンから17人の若い作家たちが本学にやってくる!本学の在校生と卒業生が中心となって準備を進める「site scenes プレーメン・ナゴヤアートプロジェクト2005」は、若者たちの制作を通しての国際交流が目指されている。9月の前半には、ドイツの作家たちは大学の宿泊施設(はじめての雑魚寝!?)を経験し、古い味噌蔵を再生した独特の空間で制作に挑むことになるだろう。制作のために滞在する作家たちをいかに受け入れるか?メンバーは不安いっぱい、でもなんだかドタバタになりそうで、そんな面白さでいっぱいになるかもしれない。とはいえ、まちに出たアート・プロジェクトは、すでに社会的な行為なのだ。若者よ、心して取り組んで欲しい。

プレーメン・ナゴヤアートプロジェクト2005  
滞在制作: 9月 2日(金) - 9月15日(木)  
交流展: 9月16日(金) - 10月 2日(日)  
\*現在サポートボランティアを募集中  
お問い合わせ: <http://dm-in.hfk-bremen.de/bnap/>

レビュー REVIEW レポート

名古屋芸術大学退任教員展2005

片山 宏(日本画) / 河本 大洋(ヴィジュアルデザイン) / 木下 稔子(テキスタイルデザイン) / 杉江 淳平(陶芸) / 森 真吾(洋画)  
2005年4月23日~5月18日  
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

アート&デザインセンターでは、2005年度事業の一環として、この度2004年度末をもって退任された先生方による「名古屋芸術大学退任教員展2005」を開催いたしました。出品をお願いしたいずれの先生も、それぞれの立場で学部の中核として名古屋芸術大学を現在の形に創り上げて来た方々です。教員の作品は教員自身の人格であり、学生の指針です。作家である教員は、その作品で自己主張し、学生に教授する立場にあります。学部開設以来30有余年の歴史が本展に凝縮されていたといえます。また、本展が、この教授の方々の築き上げられた業績を保ちながらさらなる大学の充実の一助になることと確信いたしております。大学を退任されたとはいえ大変お元気な先生方です。今後とも芸術作家として、現代に生きる意味を問う発表を続けられ、ますます活躍されることを祈念するとともに、これまでのご厚情に感謝申し上げ、本展開催のご報告いたします。  
アート&デザインセンター長 / 美術学部長 神戸峰男



ヤマムラアニメーション博物館

2005年3月25日~9月25日  
愛・地球博 長久手会場「遊びと参加ゾーン」内

《ヤマムラアニメーション博物館》は、一昨年の夏に大学主催で実施した「頭山原画展」のアニメーション作家山村浩二氏による愛知万博の展示です。子どもたちの体と声が揺れ動く長久手会場「遊びと参加ゾーン」の〈わんぱく宝島〉にあり、〈ロボットステーション〉のロボットやアンドロイドたちの真上にその別世界があります。原画や動画、美術史に登場する玉虫厨子や鳥獣戯画などの氏による模写作品が展示されています。それらは、開館前の延べ2週間に渡り、手もかじかも寒い会場で氏によって壁に直に描かれた〈アニメーションの歴史〉と一体化しています。哲学者スピノザからネーミングされたナビゲーター・キャラクター“スピーノくん”は、壁面の上で「なぜ絵は動いて見えるか」の原理を手書き文字の吹き出しから話し言葉で解いています。孫に連れられてやってきた60代の婦人がふいに壁に目をとめます。壁に描かれたライブな絵は人を壁に近づけたり離したり、触れる展示ではないはずなのに色々な感覚が動き出します。次の視覚玩具では触って回して試してみよう“動く絵”を体験できます。初日から壊れては復活する視覚玩具は、あたかも手づくりの世界が作り手と使い手の間きあいであることを証明しているかのようです。ここで“万博唯一”という3つの秘密を紹介します。ひとつはナビリオン自体が今回のためにつくられたものではなく唯一既存の建物であることです。二つ目は、展示の中央にある“ミニ洞窟”内のモニターが非公式ですが1.8インチ(4×5cm)万博最小の液晶モニターであること、そして第三はずっと示してきたように、唯一すべて一人による直筆であるという、21世紀初の万博で最もプリミティブな表現方法であることです。山村氏は、会場スタッフのために3月におこなった研修時に、印象的な言葉を残しています。「アルタミラの洞窟画からずっと絵を描いてきた人間の表現の歴史にあるイマジネーションも、アニメーションを生み出すイマジネーションも、イメージを形にしたい描きたいという衝動においては変わらないのです。」《ヤマムラアニメーション博物館》は、アニメーション作家山村浩二の世界が生まれた軌跡を見ることが出来る場のように思います。それと同時に万博のテーマである『自然の叡智』が人間のイマジネーションと深いつながりがあることに気づかせてくれるところでもあるのです。  
美術学部美術文化学科助教授 前田ちま子

RELAY ESSAY

言語と芸術……エドウィン・ハトマン

私は言語学者。それは、言葉を勉強するものだが、言語は芸術と一体どういう関係をするのだろうか?かなり緊密な関係だ。音楽と言語の関係は勿論明らかだ。その関係は私たち人間という動物と同じく長い歴史がある。人間には協力とコミュニケーションが何より重要になっているように進化してきた動物だと進化心理学者は心得る。なお、協力を別にして、人間がコミュニケーションをするとき主に使うのは言語だ。お互いに情報を伝えるときも嘘をつくときも言葉を利用して伝達する。現在の感覚でいうとちろん、喋ることによってコミュニケーションする。お互いに目を合わせて事実と虚言の混ざった発言を交換する。それは、ちゃんとした人類になったときからずっと我々のしてきたことだ。けれども、そういう直接言語交換は、時間と距離を通して伝達するためにはあんまり良くないだろう。少なくとも、現代の伝達手段が発達する前、まだ我々が洞窟に住んでマストンを殺して生で食べた大昔にはちょっと物足りなかっただろう。その時代、時間と距離を通してコミュニケーションするには、話しを歌にして子供と孫に歌っていた。そして子孫に伝えた。いまでも、我々は同じことをしてよ。最初の音楽はきっと歌詞のある歌だっただろう。その歌を手で取った拍子に合わせて歌っただろう。あるいは木の棒で石を叩いて拍子を取ったかもしれない。そういえば、私の友達の中にはそういうことをまだする人もいそうな気がする。マストンを殺して生で食べるのではなく、木の棒で石を叩いて拍子を取ることでよ。でも、ほとんどの人には、音楽はそれよりかなり進化してきた

と思う。考古学者が掘り出した一番古い楽器は尺八みたいな笛だ。それは三万年前から残っている発掘物だが、いま現在は電気ギターやオーケストラ、シンセサイザーなどが使われている。それでも、歌にはまだ歌詞がある。そして、その歌詞は世界中で文化の重要な一部になっている。美術も言語に緊密に関係している。実は、文学と美術は双子だとも言えるだろう。文学は大昔の人が住んでいる洞窟の壁に初めて絵を描いたときに美術と一緒に生まれたと思わずにいられない。それは人がマストンを殺している絵だったかもしれない。現代の理論によると、アルファベットによる文字言語は洞窟芸術からではなく、原始の会計システムから生じたことだ。その理論には説得力があるが、文字言語の意味を狭くとらえ過ぎているのではないかと思う。ということは、前述のように、最初の芸術は大昔のマストン殺し屋が土に木の棒で絵の物語を描いたときに生まれてきたと思わずにいられない。まあ、実は、私の友達の中にはそういうことをまだする人もいと思う。マストンを殺すのではなく、土に絵の物語を書くことだけれどね。そして、現在でもビジュアルアートは文字言語と一緒に現れることが多い。特にその中でも親しみやすい広告や活字、出版、メディアなどという分野は言語と緊密に関係している。ということは、ある意味では、言語と芸術は平行な軌道をたどってきたということだ。  
\* マノモスよりひとまわり大きな象 美術学部長 講師